

課題

「私」の心情の変化について、富士やその他の登場人物との関わりを踏まえて考察せよ。

1 富士山の印象について

<p>御坂峠の茶屋で富士と向かい合った時 「 頁」 「行目から」 「 頁」 「行目まで」</p>
<p>老婆が富士の写真を出してきて説明してくれた時 「 頁」 「行目から」 「 頁」 「行目まで」</p>
<p>お見合い相手の家で富士山大噴火口の鳥瞰写真を見た時 「 頁」 「行目から」 「 頁」 「行目まで」</p>
<p>御坂の茶屋の二階で仕事を始める時 「 頁」 「行目から」 「 頁」 「行目まで」</p>

富士の山頂に雪が降った時
〔頁〕 〔行目から〕 〔頁〕 〔行目まで〕

バスの老婆が富士には目もくれず、月見草を指差した時
〔頁〕 〔行目から〕 〔頁〕 〔行目まで〕

寝るまえに、カーテンをそっとあけて硝子窓越しに富士を見た時
〔頁〕 〔行目から〕 〔頁〕 〔行目まで〕

富士に妥協しかけた時
〔頁〕 〔行目から〕 〔頁〕 〔行目まで〕

娘二人を入れず、富士山だけの写真を撮った時
〔頁〕 〔行目から〕 〔頁〕 〔行目まで〕

甲府から富士を見た時
〔頁〕 〔行目から〕 〔頁〕 〔行目まで〕

それぞれが列挙した点（折々における富士に対する主人公の心情やコメント）に基づき、なぜそのような心情になったのか（コメントをしたのか）について、グループでまとめよ。

御坂峠の茶屋で富士と向かい合った時

老婆が富士の写真を出してきて説明してくれた時

お見合い相手の家で富士山大噴火口の鳥瞰写真を見た時

御坂の茶屋の二階で仕事を始める時

富士の山頂に雪が降った時

バスの老婆が富士には目もくれず、月見草を指差した時

寝るまえに、カーテンをそつとあけて硝子窓越しに富士を見た時

富士に妥協しかけた時

娘二人を入れず、富士山だけの写真を撮った時

甲府から富士を見た時

【グループワーク】各自でまとめた表をもとに、主人公の富士山への評価と心情の変化をまとめよ。

② 登場人物の人物像について

【個人作業】主人公以外の登場人物について、各人の人柄や性格・様子・行動に関わる描写とそこから読み取れることを表に書き出しなさい。

おかみさん	御坂峠の茶店の娘	サラリーマン・芸者風の女 若い知的な娘さん二人	三ツ峠の茶屋の 老婆	井伏鱒二氏

見合い相手の娘さん	
	人物描写
	読み取れること

【グループワーク】各自でまとめた表をもとに、登場人物の共通点と相違点を挙げよ。また、これらの人々が主人公に与えた影響についてグループでまとめよ。

③ 井伏氏の人物造型と、旅に来るまでの様子について

井伏鱒二「亡友―鎌瀧のころ」(『太宰治』二〇一八年 中央公社)

太宰治の「富嶽百景」という作品のなかに、私といっしょに三ツ峠にのぼったときのことを書いてある。三ツ峠の頂上で、私が浮かぬ顔をしながら放屁したというのである。これは読物としては風情ありげなことかもしれないが、事実無根である。ところがこの放屁の件について、当時は未知の仲であった新内の竹下康久という人から手紙が来た。「自分は貴下が実際に三ツ峠の嶺に於いて放屁されたとは思わない。自分の友人もまたそう言っている。自分は太宰氏の読者として、また貴下の読者として、貴下が太宰氏に厳重取消しを要求されるように切望する。」そういうような手紙であった。

おりから訪ねて来た太宰に私はこの手紙を見せた。

「どうだね、よその人でも、僕が放屁しなかったことを知ってるじゃないか。こんな行きどいた手紙を書く人は、きつと物ごと綿密なんだね。理解ある人物とはこの人のことだね。」

「知音の友ですかね。でも、あのとき、たしかに僕の耳にきこえました。僕が嘘なんか書く筈ないじゃありませんか。たしかに放屁しました。」

太宰は腹を抱える恰好で大笑いをした。しかも、わざと敬語をつかって「たしかに、放屁なさいました」と言った。話をユーモラスに加工して見せるために使う敬語である。「たしかに、なさいましたね。いや、一つだけでなくて、二つなさいました。微かになさいました。あのとき、山小屋の髯のじいさんも、くすツと笑いました。」

そういう出まかせを言って、また大笑いをした。「わツは、わツは……」と笑うのである。三ツ峠の髯のじいさんは当時八十何歳で耳が聾であった。その耳に、微かな屁の音などきこえるわけがない。しかし彼が極力自説を主張してみせるので、私は自分でも放屁したかもしれないと錯覚を起しだした。自分では否定しながらも、ときには実際に放屁したと思うようにさえなつた。こんなふうになるまでにはかなりの月日がたっている。

当時、太宰は安心であった。但、安心であったという意味は、モヒ剤(薬物)を注射するおそれなくなつたこと、自殺の恐れがなくなつたことである。彼は御坂峠の頂上で八十日あまり峠の茶店に下宿して、すっかり健康を取りかえしていた。これは偶然に拾い得たことで、もともと健康をなおす目的で山に籠つたのではない。東京の下宿生活を切り上げるために逃げて行つたのである。全く逃げ出すよりほかはなかった。彼は山に籠る前には荻窪の鎌瀧という下宿屋にいたが、いつも二人か三人の食客を泊めていた。昼間はその食客の友人がやって来て、いつ行ってみても四人五人の客のいなかったことがない。(中略)

私は旅行に出て御坂峠の頂上の茶店に滞在した。一週間か二週間の予定であつたのが四十日余りになつた。その間に、たびたび太宰に手紙を出して、この山の上に来て私と入れ代りにここに下宿したらどうかと勧誘した。太宰よりも先に私の家内が山に訪ねてきた。何十日も私が家に帰ってい

なかったので、偵察をかねてやって来たのである。そのくせ、原稿用紙が足りなくなっていると思
って持つて来てやったと言った。彼女は珍しく薄化粧をほどこしていた。それから二、三日たつて
太宰がやって来て、「やっと平野屋に借金を払って、下宿を引き払ってきた。てんてこまいでした。」
と言った。北さんが私の家内に言ったことづけは、「修治（＝太宰）にも、やっと取巻連れから足
を洗ってもらいました。近々、御坂峠に行つて、靈山の氣に打たれることになるでしょう。これで
修治さんも、ほっとしたことでしよう。しつかり書いてもらいたい。」というようなことであつた。

井伏鱒二「解説（『太宰治集上』）」（『太宰治』二〇一八年 中央公社）

※美知子夫人の手記より

「富嶽百景」の書きはじめ「富士の頂角云々」は、私の父、石原初太郎の著書から、そのまま、
盗用しているので驚きました。太宰は、「おやじなら文句は言えまい」と言っておりまし

【個人作業】

『富嶽百景』で描かれているものとこれらの資料との違いを明らかにせよ。

【グループワーク】 『富嶽百景』における太宰のねらいをグループでまとめよ。

④ 母堂と見合い相手の娘さんについて

井伏鱒二「亡友―鎌滝のころ」（『太宰治』二〇一八年 中央公社）

翌日、太宰の見合いに私は付添人としてついて行った。私の家内は山に残っていた。斎藤さんは会社の会議があるので留守であった。奥さんの案内で、私たちは写真の本人の宅に伺ったが、奥さんと私は応接間に入るとすぐ席を外した。奥さんがそうするように私に囁いたからである。太宰とこの家の主婦が、玄関まで私たちを見送りにたつて来た。「バスの都合で、僕は急ぐからね」と私は太宰に言った。太宰はその日、見合いがすむと町の宿に一泊して、翌日のバスで山の宿に帰る予定をたてていた。私は山の宿に帰って、翌日の一番バスで家内と一緒に甲府に出て東京に帰った。

井伏氏宛書簡（『太宰治全集』十一卷一九七九年 筑摩書房）

石原氏御母堂よりは、先日もずいぶんごていねいな御手紙をいただき、私も、いままで私の生活、現状をも、少なくとも意識してかくしたところ一つもない告白を、もし、そのために、破談になっても、それは仕方がない、と覚悟をきめて、書いて差し上げましたが、今日は御母堂と姉上様と、お二人より、長いお手紙いただきました。御母堂のお手紙には、「虚栄をはるといふことは私共大いらいですが、――何事もつつしかくしなく、むりをしない様に一步一步正しい道をあゆんで行くのが一番いいと思います、まごごろと職業に対する熱意とが何よりのたからです、」とその他、涙ぐましいはげましのことたくさん書いてありました。

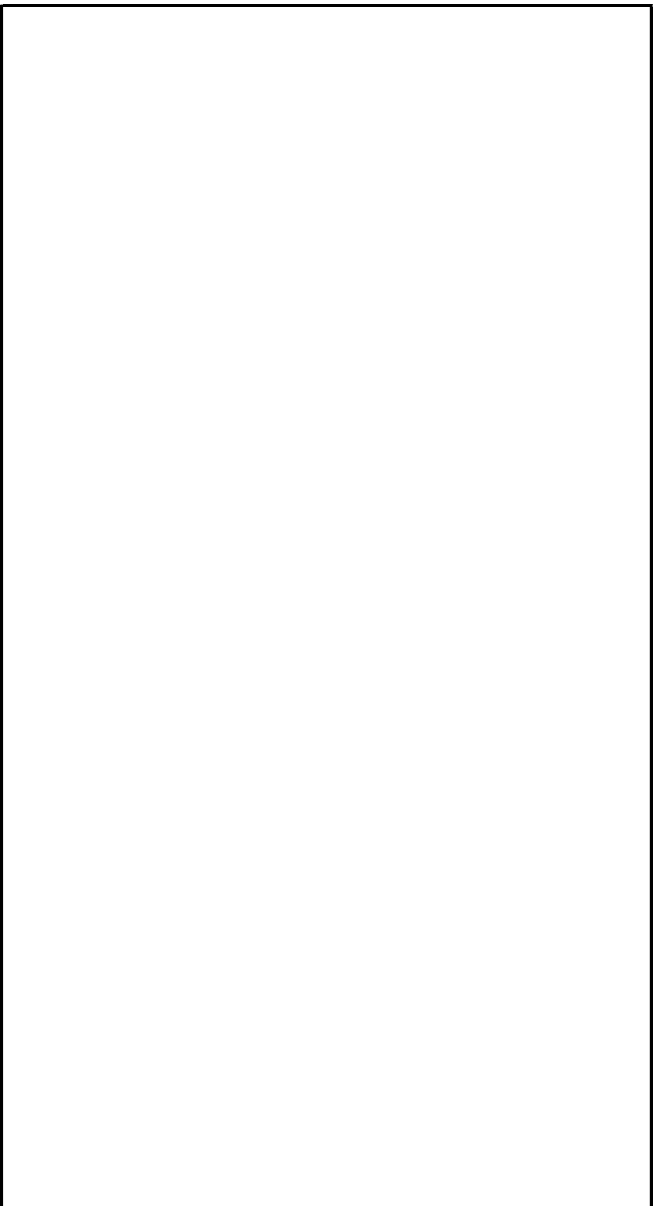
井伏鱒二「解説『太宰治集上』」（『太宰治』二〇一八年 中央公社）

さて、御崎町で、真っ先に書きましたのは、「続富嶽百景」でございます。「口述するから、書いてくれ、大いに助かる」と申し、机の中にはさんで、始めました。それは忘れもせぬ、「ことさらに月見草を選んだわけは、……」のくだりからでございます。（中略）それから「トンネルの冷たい地下水を、頬に、首すじに――」のところまで、書き進みましたとき、「もういい、自分で書く」といつて、口述を止めました。それから又、「甲府から帰ってくる」とから、口述いたしました、書き終わりました。

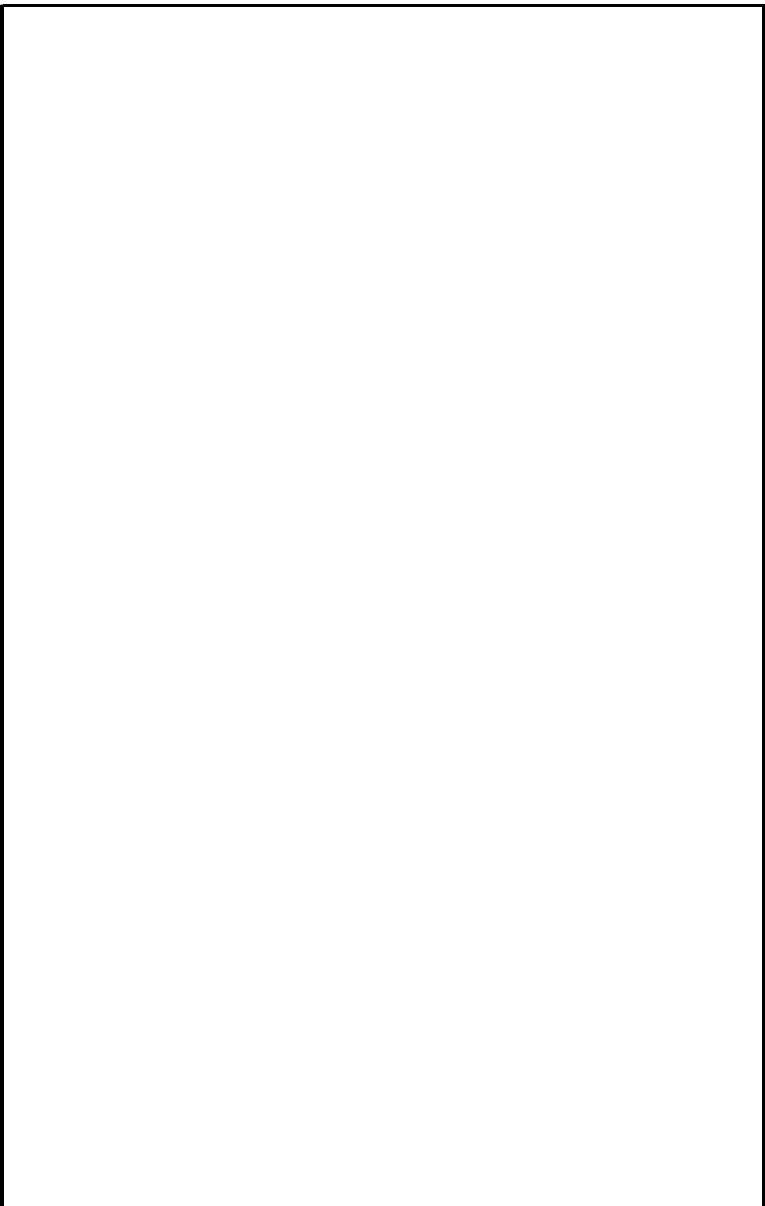
尚、ずつとあとで、妹が読んで「あら、あの愚問（富士に雪が降っていますか）を発したのは、私よ」と、抗議いたしました。あれは、昭和十三年九月十八日の夕刻でした。私と妹と二人、太宰を、バスの出るところまで見送ったのですが、私には、全然そのときの会話の記憶がなく、太宰も、妹の抗議に対し、黙っておりました。きつと二人とも我を忘れていたのでございましょう。私にとりましては、あの質問のことは冤罪らしゅうございます。

【個人作業】

『富嶽百景』で描かれているものどこれらの資料との違いを明らかにせよ。



【グループワーク】 『富嶽百景』における太宰のねらいをグループでまとめよ。



⑤ おかみさんと茶店の娘さんについて

太宰治「九月十月十一月」(『太宰治全集11』一九九九 筑摩書房)

(上) 御坂で苦慮のこと

甲州御坂峠の頂上にある茶店の二階を借りて、長編小説すこしずつ書きすすめて、九月、十月、十一月、三つきめに、やっと、茶店のおばさん、娘さん、と世間話こざわらず語り合えるくらいに、馴れた。宿に着いて、すぐ女中さんたちに軽い冗談言えるような、器用な男ではないのである。それに私はこれまで滅茶な男のように言われているし、人と同じ様に立小便しても、ああ、やっぱりあいつは無礼だ、とたちまち特別に指弾を受けるであろうから、旅に出ても、人一倍、自分の挙動に注意しなければ、いけない。

私は、おとなしく毎日、机に向かっていた。おばさんも、娘さんも、はじめのうちは、私のおとなしさに、かえて奇怪を感じた様子で、あのお客さんは女みたいだ、と陰口きいて、私は、それをちらと聞いて、ああ、あんまりおとなしくしてもいけないのか、とくやしく思った。それから努めて、口をきくことにした。晩にお膳を持って来る娘さんにも、何か一こと話しかけたく苦慮するのだが、どうも軽くふつと出ない。口をひらけば、何か人生問題を、演説口調で大声叱咤しそうな気がして、どうも何気ない話は、できぬ。よっぽど気負った男である。とうとうある晩、お膳を持って部屋へはいつて来る娘さんを見るなり嘔き出した。自身の苦慮が、毛むくじやらの大男の、やさしい声を出そうとしての懸命の苦慮が、おかしかったからである。娘さんは、顔を赤くした。

私は、気の毒に思い、いいえ、あなたを笑ったのじゃないんだ。僕は、あんまりもそもそして、かえってあなたたちに気味わるがられていやじゃないかと、心配して、毎晩、あなたがお膳を持って来てくれるときだけでも、何か軽い世間話しようと思つて、いろいろ考えるのだが、どうも、考えれば考えるほど話すことがなくなって、自分ながら呆れて、笑ってしまったのです、と口ごもりながら弁解した。娘さんは、すると、落ちついて私の傍に座って、あたしも何かお話ししようと思うのですが、お客さんがあんまり黙っているのです、つい、あたしも考えてしまつて、何も言えなくなります。考えると話すことなくってしまうのですね、と答えた。私は微笑した。それきり話、また無くなった。こまつたね、話がないんだ、と言つて笑うと、娘さんは、私の窮屈がついてのを察して、男は無口なほうがいい、と言いついてさっさと部屋から出て行つてくれた。

だんだん茶店の人たちも、あのお客は、ただ口が重いだけで、別段に悪だくみのある者でないということがわかった様子で、お客さんのお嫁さんになるひとしあわせですね、世話が焼けなくて、とおばさんに冗談言われて、私は苦笑して、やっと打ち解けて来たころには、はや十一月、峠の寒気、堪えがたくなつた。

(中) 御坂退却のこと

そろそろ私は、なまけはじめた。どうしても三百枚ぐらいの長編にしたいのである。まだ半分もできていない。いまが、だいじのところである。一日ぼんやり机のまえに座って、煙草ばかりふかしている。茶店のおばさんが、だいいちに心配しはじめた。お仕事できますか？ と私が階下のストーブにあたりに行くたんびに、そう尋ねる。できません。寒いから、かなわない、と私は、自分の怠惰を、時候のせいにする。おばさんは、バスに乗って、峠の下の吉田へ行つて、こたつをひとつ買って来た。

そのとき一緒に、やさしい模様のスリッパも買って来た。廊下を歩くのに足の裏が冷たかろうという思いやりのようであった。私はそのスリッパをはいて、二階の廊下を懐手して、ぶらぶら歩き、ときどき富士を不機嫌そうに眺めて、やがて部屋へはいつて、こたつにもぐつて、何もしない。娘さんも呆れたらしく、私の部屋を拭き掃除しながら、お客さん、馴れたら悪くなったわね、としんから不機嫌そうに呟いた。私は、振り向きもせず、そうかな、悪くなったかな。娘さんは私の背後で床の間を拭きながら、ええ、悪くなった。このごろは煙草も、日に七つずつ、お仕事は、ちっともすすまないし、ゆうべは、あたし二階へ様子見に来たら、もうぐうぐう眠っていた。きょうは、お仕事なさいね。お客さんの原稿の番号をそろえるのが、毎朝、ずいぶんたのしみなのだから、たくさんすすんでいると、うれしい。

私は、ありがたく思った。この娘さんの感情には、みじんも「異性」の意識がない。大げさな言いかたをすれば、人間の生き抜く努力への声援である。

けれども、いかな人情も、寒さにはかなわない。私は東北生まれのくせに、寒さに弱く、ごほん、ごほん変な咳さえ出て来て、とうとう下山を決意した。東京へ帰ったら、また、ぶらぶら遊んでしまつて、仕事のできないのがわかつているから、とにかく、この小説の目鼻のつくまでは、とひとまず、峠の下の甲府のまちに降りて来た。具合がよかつたら甲府で、ずっと仕事をつづけるつもりなのである。

津島美知子『回想の中の太宰』(一九五八年 人文書院)

太宰治は、茶店備え付けの荒い棒縞のどてらに角帯を締めて座り、五歳ぐらいの男の子が、その膝に上がったり下がったりしていた。前に甲府の私の実家で会ったときよりも彼は若々しく、くつろいでみえたが、先刻バスをおりたとき私を迎えた、茶店のしつかり者らしい三十過ぎのおかみさんと、大柄の妹さんと、ふたりの同性の眼が、二階の座敷に上がつてからも私には気にかかり、モトヒコという、彼にまつわりついている子のことも邪魔に思われた。

【個人作業】

『富嶽百景』で描かれているものとこれらの資料との違いを明らかにせよ。

【グループワーク】 『富嶽百景』における太宰のねらいをグループでまとめよ。

日常を物語にしてみよう！

一年

組

番

1 日常の出来事を物語にする際に、気を付けたこと、工夫したことを書こう！

2 グループの人の作品を読んで、面白いと思った工夫を挙げよう！

3 物語を読む際に、今後着目してみたいことを書こう！